



活動
理念

障害のある人々に、「豊かな自然とおおらかな人情に恵まれた田園地帯で、安心して心身ともに健康に生活できる場を提供」

■ PROFILE 事業類型:福祉事業所(A型・B型)

代表理事/中村隆一郎 常務理事/中村邦子

総務・企画担当/天野雄一郎

社員/スタッフ144名 利用者249名

■ 事業概要

- ・製茶/養豚/肉牛繁殖/露地野菜/施設野菜/水稻/水耕 等
- ・畜産加工/精肉/解体/惣菜・パン/菓子製造 等
- ・カフェレストラン/アンテナショップ 等

■ 地域の現状

- ・基幹産業は畜産や畑作を中心とした農畜産業。
- ・障害者に対する偏見は一定数あった。

■ 農福連携をはじめたきっかけ

- ・創業者中村隆重氏が弟と「いっしょに働ける場所づくり」のため。



ここが point!

- 利用者の個性と希望を重視
- 必然としての6次産業化
- 多様な就労機会創出
- スタッフによる定期的なメンタリングとマネジメント

■ 沿革(画期区分)

助走期

障害者の就労機会創出を目的として農事組合法人を設立、農業生産体制整備(第1次産業)

昭和47年(1972) 社会福祉法人白鳩会設立

昭和53年(1978) 農事組合法人根占生産組合設立 製茶・養豚・肉牛繁殖から開始

形成期

白鳩会施設内及び鹿児島市内で都市生活する利用者の生活・就労支援を目的として、おおすみエリアとかごしまエリアに加工生産体制を整備(第1次産業×第2次産業)

昭和63年(1988) 「大隅茶」オリジナル商品開発

平成3年(1991) 「手作りハム・ソーセージ」等の畜産加工品開発

平成5年(1993) 花卉生産開始

平成12年(2000) アンテナショップBeehive開設(鹿児島市)

発展期

利用者の多様で通年的な就労機会創出を目的として、さらなる高付加価値製品の製造及び多品目生産体制を整備(第1次産業×第2次産業×第3次産業=6次産業化)

平成13年(2001) 「天然酵母パン」商品開発

平成16年(2004) 「お食事処 花の木」開設

平成17年(2005) 「花の木大豆工房」開設(鹿児島市)

平成20年(2008) 「花の木冷菓堂」開設(鹿児島市) 水耕栽培開始

平成24年(2012) 「HANANOKI Farmlab」開設(鹿児島市)

平成25年(2013) ニンニク生産開始

平成26年(2014) トマト生産開始

平成27年(2015) 水稻生産開始

平成28年(2016) 「Café-Terrace HANANOKI」開設

平成29年(2017) セルプおおすみ新築移転 花の木ファームに名称変更

令和元年(2019) セルプ花の木を第2花の木ファームに名称変更

令和2年(2020) 継承:中村隆重氏が参与に、中村隆一郎氏が理事長に就任



■ 白鳩会のマッチングストーリー

「農業しかなかった」地域基幹産業の農業しかマッチングできなかった。(吉田ほか2020)より引用

大隅地区とりわけ根占地区は鹿児島市から(当時)2時間以上もかかり、まさに陸の孤島と言える「遠隔地」であり、茶やサツマイモなどの一般畑作や養豚・養鶏などの畜産が行われる農産地帯であった。初代理事長が福祉施設を立ち上げるにあたり、「農業しか授産(障害者の就労支援)事業としての選択肢はなかった」と語っている。

「必然としての多角化→6次産業化」農業をベースに利用者に多様な労働機会をマッチング。

創業者の事業展開は、(いま振り返れば)制度や地域の社会経済の状況より先んじていたことから、行政等の理解が得られず孤立感に苦悶することもあったが、徐々に就労支援制度化や生活介護施設運営に対する社会的支援も得られるようになってきた。この初期の孤立期間に現在の事業スタイルの地盤がほぼ形成されたといえる。

利用者への生活支援は生活介護・居住支援により行われ、就労支援は、茶・蔬菜園芸(露地・施設)・養豚の農業部門、それら生産物を用いた加工部門そしてカフェレストランの展開による購買部門として構成されている。やがて鹿児島市内にアンテナショップやジェラート施設なども開設し、生産から消費まで一貫通貫の事業展開となっている。

この背景には、利用者の個性を活かし、希望を尊重しよう、という理念が見てとれる。つまり、利用者の多様な働き方と工賃向上の両立を追求した結果、1次産業(製茶・畜産等)の範囲のみならず2次産業(畜産加工や惣菜・菓子製造など)から3次産業(接客から料理など)まで利用者のための労働選択肢を拡げつつ、顧客に喜んでもらう安心安全な商品づくりを追求した結果、現状の事業形態に行き着いた、と言える。

「継承と新たな発展へ」より多様な農福マッチングを目指して。

2019年に創業者の中村隆重氏より中村隆一郎氏へと事業承継が成され、農福連携のいわゆる「老舗」としての地位と実力、また後進の事業所への影響力は言うまでもないが、新しい事業形態への転換を迫られている状況である。今後の展開として、これまで構築してきた多角化による各部門の安定と結合性の再編成を図りながら、どのような成長戦略を取るべきか模索している。

これまでの自己完結的な事業体から、地域連携をとりながら展開していく段階にある。現理事長が「大隅半島全体を見据えたソーシャルファームを目指しながら地域内プラットフォームの役割を果たしたい」と語るように、障害者を含め多様な人々が集う「交流拠点」「多面的資源」としての農業の実践を目指している。

さらに、農福が「経済主体」と「生活主体」であると同時に、地域の「文化主体」となることを目指し、そのための要件を地域ネットワークとともに模索したい、と語る。経済・社会のみならず、文化としての農業の在り方の模索。白鳩会が地域内農福プラットフォームとなることは行政機関含め自他共に認めている。その実現が、地域の障害者により多様なマッチングを可能とすると考えられる。

■ 白鳩会のマッチングポイント!

1 マッチングの形態

利用者の個性や希望等を考慮し適材適所。

2 その発展過程

利用者の多様な働き方への適合と工賃向上のために、労働環境の多様化を追求した結果として6次産業化に至った。(現在では、畑作・畜産・加工・製造・接客など、多様な労働機会があり、組み合わせも可能)

3 行政による財政的・人的支援

農水省や厚労省の制度等を活用している。役場や県庁等の基礎自治体との協力体制は徐々に構築され始めている。



4 農業関係団体・福祉関係団体との連携形態

農協とは出荷関係、社協とは情報交換や視察等の関係性。

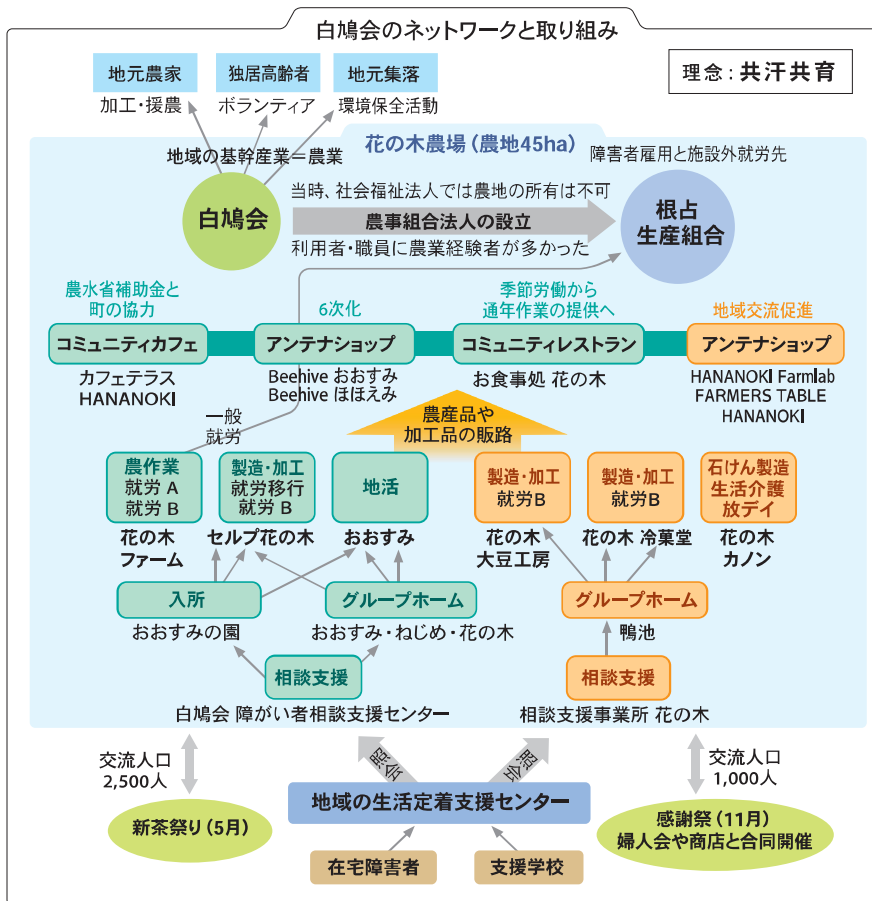
5 マッチングの対象

地域: おおすみエリア(南大隅町)・かごしまエリア(鹿児島市)
品目: 製茶・養豚・肉牛繁殖・畑作(露地・施設)・水稲・水耕・畜産加工・惣菜・パン・菓子製造等
利用者: 精神障害者・後天性難病者・触法障害者・養護学校非行者等



6 コーディネーターの育成方法

施設長補佐・就労担当・触法担当ほか現場職員で定期的議論を行っている。業務種目が多いため、人間関係などに考慮し組み換えを日常的に行う。100人以上働いているため、細やかな調整が必要。人材確保と育成は喫緊の課題。現在、地域内外の多様な人材を巻き込むべく活動中。どうアライアンスをとるかなどが課題である。



観光とは景観を保つこと、景観を保つには効率のよい農業を行うことが大切。景観が保たれれば多くの人が訪れて、障害者が頑張っている姿を多くの人に感じてもらえるオープンな農場となる。